

山猫は眠らない3—決別の照準—

2005(平成17)年8月28日鑑賞(ユウラク座)



監督=P.J. ビース/出演=トム・ベレンジャー/パイロン・マン/ジョン・ドーマン/ジ
ーネッタ・アーネット/デニス・アーク (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配
給/2004年アメリカ映画/90分)

……伝説の「スナイパー」トマス・ベケットを主人公とした『山猫は眠らない』シリーズ第3作の舞台は、去る4月30日戦後30周年を迎えたばかりのベトナムのホーチミン市。中米やバチカン半島よりはなじみのある地域(?)だが、そのターゲットとして指名されたのは政府要人ではなく、かつての戦友であり恩人のポール・フィネガン氏……? なぜ、そんな命令が……? 彼は死んだはずでは……? さて、古傷を抱えたベケットの苦悩は……? そして彼はどんな結果を残すのだろうか……? 第3作は、ラストでの引き金へのタッチが大きなポイント(?)。これを見逃すことのないよう十分ご注意ください……?

ベケットは1949年生まれ

第1作「山猫は眠らない」では、1991年に中東のパナマで麻薬組織指導者オチョアとアルバレス将軍を、第2作「山猫は眠らない2—狙撃手の掟—」では、2001年にバルカン半島で民族浄化を指揮するヴァルストリア将軍をターゲットとして、スナイパーとしての任務を果たしたベケット(トム・ベレンジャー)。今、彼は任務の成功によって、約束どおり海兵隊上級曹長に復職して、のんびりとその任務に従事中……。と思ったら、この第3作の冒頭、どうもそうではないことが明らかに……?

ベケットが海兵隊に入隊したのは1965年頃で、ベトナム戦争に従軍したのは1972年頃。30年も経てば海兵隊の雰囲気も大きく変わっており、既に「老兵」扱

いとなったベケットには、今の海兵隊の雰囲気は馴染めない様子。

考えてみれば、1949年生まれのベケットは私と同じ年。56歳にもなって海兵隊の任務はそりゃきついはず。もちろんベケットは自分自身でもそれはわかっているが、他にすることがない孤独な身では、1人ホテルに泊まり酒を飲みながら、ただその任務に従事するのみ……。

ベトナムのホーチミン市は……？

1960年代初頭に始まり1975年4月30日に終結したベトナム戦争は、第2次世界大戦後のアメリカにとって最大の「爪痕」を残したものだが、200万人近くが犠牲となった南北ベトナム人民の悲しみがアメリカ国民以上だったことは当然。しかし、祖国からアメリカを駆逐して「ベトナム民主人民共和国」を作り上げたベトナム人民は、奇跡的な戦後復興を成し遂げ、さる2005年4月30日にはベトナム解放30周年の記念式典を盛大に行ったことは新聞でも大きく報道された。

『山猫は眠らない』シリーズ第3作の舞台は、ここベトナムのホーチミン市（旧サイゴン）。アジアで最もバランスの良い戦後復興を成し遂げた国ではないかと私が考えているベトナムだが、一步踏み込んでみれば、あのベトナム戦争の爪痕があちこちに。この映画に登場する迷路のような地下トンネルもその1つ。

これは、かつて「南ベトナム民族解放戦線」がつくったもの……。

今回のターゲットは……？

ホテルで酒を飲み、昔の戦争映画をテレビで観ながら、過去の思い出に浸ることしかすることのないベケット。いつの間にか眠っていたベケットを叩き起こしたのは、NSA（国家安全保障局）のエイブリー副局長（デニス・アアント）からの使い。彼らは「鍵が開いていたから……」と弁明しつつベケットにシャワーを促し、ベケットを早々にエイブリー副局長の元へ。今回、副局長からベケットに伝えられた指令は、かつてベトナム戦争で共に戦い、ベケットの命の恩人でもある戦友ポール・フィネガン（ジョン・ドーマン）の狙撃……。さて、それは一体なぜ。そもそもポールは既に死亡したのでは……？

その政治的背景は……？

ベトナム戦争は1950年代の朝鮮半島への派兵に続いて、アメリカの対アジア戦略の一環として始まったもの。「世界の憲兵」としてのアメリカの役割は今日でも同じで、その当否、賛否は別として大きなものがある。

「泥沼」化したベトナム戦争の「終結」に向けてアメリカが懸命の努力を尽くしたことはまちがいないが、それでもすべてをクリアできなかったのも当然。ポールは既にベトナム戦争の「英雄」として死亡していたはずだったが、実は生き残っていた。そして、ベトナム国境でイスラム過激派と取引をし、テロを組織しようとしているという驚愕の事実が……？

そして今やこのポールの息子ニール・フィネガンは、若手上院議員として人気を博し、次期大統領候補とまで言われている人物。こんな時、ポールがホーチミン市で麻薬取引によって逮捕されたりすれば大変なことに……。すべてを闇に葬るためには、ベケットの「一撃必殺」の弾丸によって、ポールを抹殺しなければ……？

寄る年波には……？

エイブリー副局長は、ポールをワンチャンスで一撃必殺できるのはベケットしかいないとベケットにご執心だが、周りの人たちは必ずしも今やスナイパーとしてはご老体となったベケットを信用していない様子……？

現に、ポールの息子ニールの結婚式で、ポールの手紙を読みスピーチをしたベケットは、女医をしているポールの未亡人(?) シドニー・フィネガン(ジーネッタ・アーネット)とのダンスの最中に、手が震えていることを見破られる始末。そして検査の結果は……？

もっとも、この時のシドニーのアドバイスがラストシーンで鮮やかに蘇ってくるから、よくご注意を……。

「あの設定」と同じ……？

ベトナムに残ったかつての戦友を倒すためベトナムに赴く……。この設定は、

ベトナム戦争を描いた最高傑作であるフランシス・フォード・コッポラ監督の『地獄の黙示録』と同じ設定。すなわち、ベトナムで今、現地民の支持を受けて「神の王国」を創っているのは、かつてベトナム戦争でアメリカの優秀な軍人であったカーツ大佐。そして、カーツ大佐暗殺の任務を受けたのは、ベトナム戦争に従事した中で自分の人生を失い、虚無的思想に落ち込んでいたウィラード大尉。この2人の登場人物を中心とし、ベトナム戦争を軸として、まさに『地獄の黙示録』というタイトルがピッタリの難解で哲学的対話がいっぱい盛り込まれた傑作がこの映画だったが（『シネマルーム1』66頁参照）、『山猫は眠らない』シリーズはそんなに難解ではないのでご安心を……。

失敗も何のその……？

スナイパーが「一撃必殺」をモットーとしているのは当然だし、事前に十分な準備を整え、万全な環境下で決行するのだから、一流のプロとしての腕さえあれば、狙撃成功の確率が高いのが当然。むしろ難しいのは、狙撃そのものよりも、狙撃後の脱出の方では……。少なくとも『山猫は眠らない』シリーズ第2作はそうだった。

この第3作でも、現地でクアン刑事（バイロン・マン）から伝えられる用意周到な準備態勢をみれば、成功すること自体は当然と考えられたし、本人も自信満々……。ところが現実には……？

ミスの原因としては、「ある事実」を指摘することができるが、そんな「弁解」が無意味なのがプロの世界というもの。思いがけない「失敗」にベケットもそしてエイブリー副局長も意気消沈かと思ったら、意外にそうでもない。「失敗も何のその……」という根性はたいしたものだが……？

またしても失敗だが……？

1回目のポール狙撃の失敗によって警察に逮捕されてしまったベケットだが、何とかそこから脱出(?)して今は、再度クアン刑事と2人でポールの追及に……。南ベトナム民族解放戦線が地下に掘った迷路のようなトンネルをつたって、やっとポールのアジトを発見した2人だったが、ここでもクアン刑事がドジなこ

とに、足を踏み外して転落……。どうも「第3作」では、主人公たちはドジの連続だが……？

一瞬の早ワザに注目！

何とか、ポールの部下たちの追及をかわしたベケットだったが、クアンは今や敵の手に……。もっともクアンもポールの部下との「決闘」に勝利して何とか生き残っていたが、大勢の部下たちに取り囲まれているうえ、その頭にはしっかりと銃口が向けられていた……。ライフルの照準を合わせながら岩影に身を潜めているベケットと大声で「対話」するポール。そして、自分はどうせ殺されるのだから早く任務を全うしろ、と叫ぶクアン。

さて、こんな状況下、ベケットはどんな知恵を使い、どんな早ワザを見せてくれるのだろうか……。それが、この映画の最後の一瞬のハイライト。決してお見逃しのないよう十分ご注意を……。

『山猫は眠らない』シリーズ第4作は……？

第2作の手応えを感じとった製作陣は直ちにこの第3作に着手したとのこと。しかし同じように、この第3作の公開後、果たして『山猫は眠らない』の第4作の製作はあるのだろうか……。今回は結果的に成功したものの、多少問題ありの成功。そしてポールの狙撃に成功したものの、字幕にはポールの息子のニール上院議員が辞任したこと、そしてエイブリー副局長が自殺したことが報じられていた……。さて、それはなぜ……？

こんな結果となつては、既に56歳となったベケットには今後のオファーは来ず、ただ「老兵は消えゆくのみ」なのだろうか……？

さて、そんな目で、『山猫は眠らない』第4作の誕生(?)に注目しよう……。

2005(平成17)年8月29日記